

天眼

コロナから天然痘へ

永田 和宏

3年ぶりに国際会議に出席して帰国したばかりである。細胞内でタンパク質がどのように作られ、そして分解されていくのか。いわば『タンパク質の一生』(拙著、岩波新書)に関するシンポジウムであり、私の研究分野である。2年に1度開かれていたのだが、コロナ禍で4年ぶりの開催となった。

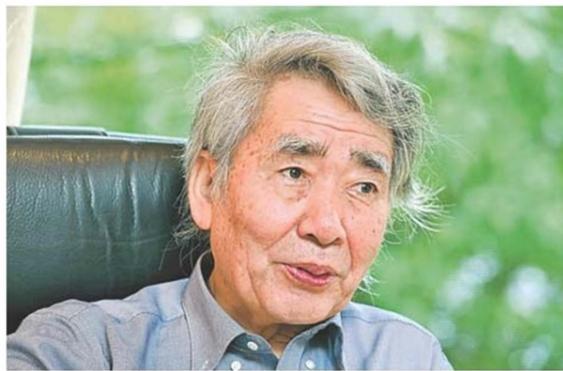
アイルランドのダブリン郊外の小さな村。夜は10時半を過ぎてはまだ明るい。従来、年に2度か3度は世界のどこかで会っていた友人たちと旧交をあたため、その仕事の進展ぶりに目を見張り、そしてビール片手に楽しく話す。最後は恒例のダンスパーティーまでついて、対面のミーティングに勝るものはないと改めて実感した。

そのあとドイツのハイデルベルク

へ回り、同じ会議にも出席していたハイデルベルク大学のB教授夫妻に夕食に招かれた。私の研究室にいた学生が留学中でもあり、彼を交えてレストランの戸外の席で楽しい時間を過ごした。あまり暗くならないうちにと別れたのが10時過ぎ。

そこまでは良かったのだが、帰国と同時に飛び込んできたメールにびっくり。B教授からで、コロナ陽性になったと言った。私はフランクフルトの空港でPCR検査を受けて陰性だったのだが、これはまずいとすぐに検査に走ったら、あらら、抗原検査だけで見事、陽性のラインが出てしまった。

日本に帰ると、まさにコロナの第7波が始まったところである。オミクロン変異のBA.5株に変ったことで、これまでにない感染爆発をきた



し、終息の見通しは立っていないようである。改めて、ウイルスとの長期戦、共生を考へざるを得ない。

人類の歴史は感染症との闘いの歴史であったとはよく言われる言葉だ

が、人類が集団生活を始めた時から、感染症はもつとも恐るべき敵であり続けた。しかも、現在までに人類が撲滅することができた感染症はたった一例しかない。それが天然痘である。

天然痘はエジプトのラムセス5世のミイラにもその痘痕があることから、名前の特定できる最古の患者だといわれている。「あばたも笑窪」という言葉も残っているように、天然痘にかかると命が助かっても、特に顔面に顕著な痘痕が残り、死亡率の高さとともにこの痕跡への恐怖も強かったに違いない。日本でも聖武天皇の時代に最初の大流行が起こり、藤原四兄弟(武智麻呂、房前、宇合、麻呂)がそろって死亡するなど、平城京を震撼させたという。これを鎮めようと作られたのが東大寺

の大仏である。

また、京都で後醍醐天皇の時代に流行した天然痘を、百万遍念仏を行って見事に鎮めたことから「百万遍」の寺号を与えられたのが、現在の百万遍知恩寺である。世界のみなならず、わが国においても天然痘は最大の脅威の一つであったことはまちがいない。

一方で、天然痘は、人類が初めて撲滅に成功した感染症でもある。この勝利に、一人の日本人が大きな役割を果たしたことはあまり知られていない。

それがWHO(世界保健機関)の天然痘撲滅作戦本部長となった蟻田功である。蟻田を中心とするWHOのチームは天然痘患者を治そうとするのではなく、天然痘そのものを地球上から抹消するという、途方もない(と考えられた)プロジェクトにまい進する。天然痘根絶10年計画である。

世界各地で天然痘の発生をキャッ

手すると、直ちに患者だけでなく周辺の住民にもワクチンを接種するという、気の遠くなるような地道な作業を続けたのである。いわゆる「封じ込め作戦」であるが、アフリカやインド各地のほとんど道のない地域や、紛争中のゲリラ活動の活発な危険と隣り合わせの地域などを、わずか数人で巡っていく蟻田の手記には、感動を覚える。WHOが天然痘根絶を宣言したのは、1979年のことであった。

天然痘が根絶できたのは、人から人へしか感染しなかったこと、そして感染が痘痕という外からでも容易に判別できる特徴を持っていたことによる。他のウイルス感染症の場合には、新型コロナウイルスがそうであるように他の動物経路であることが多く、こうなると原理的に根絶は無理である。新型コロナウイルスも、予防に努め、うまく共生していく以外に道はなさそうである。

(J-T生命誌研究館館長、歌人)